



## やっぱり「ロック」に限ります

私は2007年にパチンコ業界の歴史をまとめた書籍を書いた際、当時の日遊協広報誌にゲストで呼んで頂き、業界について考えていることなどをお話しさせていただきましたことがあります。その際合間の雑談中、司会者の方から「音楽はどんなのがお好きですか?」と聞かれ、「何でも聴きますが、特にポップスやロックが好きです」と答えると、「全然そんな風に見えない、クラシックが好きかと思いました」などと驚かれ、逆に（私はそんな風なイメージがあるのか!?)と、ビックリしたことがありました。

しかし思い返してみると、確かに私の音楽遍歴といえば、小学校低学年の頃に祖父からもらったクラシックレコードから始まった…といえるかもしれません。当時祖父は書店を経営しており、子供向けに出版されたレコード付きクラシック全集本をプレゼントしてくれたのです。それはショパンやベートーベンなどそうそうたる作曲家の生い立ちや曲の解説書の間にはLPレコードが挟まっている作りで、確か全10巻の「大作」であったように思います。

私はレコードを聴きながら解説書を読むのを楽しみにしていたのですが、有名作曲家たちは幸せな生涯を送った方ばかりでは決してなく、20代で発狂して自殺してしまったとか、晩年は誰も詳細を知らないとか、そうした悲しい記述にも、子供ながらに胸を痛めていたものです。またそんな内容を知った後で聴く曲は、妙に物悲しい響きを持っているような気がして、数年間はそんな風に何度も聴いていました。

その後、歌謡曲やアイドルソングがTVで連日流れるようになると、「およげ!たいやきくん」やピンクレディーなどヒット曲のレコードを買って楽しんだりしていましたが、高校生になると「MTV」の放送開始をきっかけとした洋楽ブームが訪れ、一気にそちらの方向へ興

味が向いていきました。当時はマイケル・ジャクソンを筆頭に、デュラン・デュラン、カルチャークラブ、マドンナ、ザ・ポリス、ワム!などといった海外のミュージシャンたちが、毎回キャッチーな新曲とともにユニークなビデオを作成し、全世界で大ブームを巻き起こしていました。日本でも、私が住んでいた神奈川県ローカル局で連日そうしたビデオを流してくれ、毎日食い入るように観ていたものです。

さらに、洋楽の中でも「ヘヴィ・メタル」というジャンルは独特で、クルクルに巻いた長髪とボロボロのような衣装がトレードマークのバンドメンバーたちが、恐ろしい程の早さでギターを弾いたりものすごい高音で叫ぶように歌ったり、当時は本当に驚かされたのを覚えています。そうしたメタル系も、さらに追っていくとジャンルが細分化されていたりして、音楽というのは知れば知る程奥深いものだと感じさせられました。

そんなこんなで、すっかり年を取った私が気に入っているのは、残念ながらクラシックではなく、やはり海外のロックがメインです。中でもAC/DC、ブラック・サバスといったハードロックバンドや、女性ボーカルの草分けであるデビー・ハリーを擁したロックバンドのブロンディなどが、かなり長い間のお気に入り。彼らの曲は、今でも映画やCMなどで使われることが多く、長きに渡って広く影響を与えながら活動を続けているその姿に励みをもらうような気持ちで、今も楽しませてもらっているのです。



数年前に処分してしまった、クラシックの全集本（実家で捨てる前に写真に撮っておいた）

じんぼう・みか

法政大学卒業後、文具メーカー勤務を経て業界誌記者となり、1993年独立。取材記事、コラムなど連載。近著「パチンコ年代記」(パジリコ、07年)